

## メッセージアウトライン

### イザヤ40：27～31「主を待ち望む者」

[27]「ヤコブよ、なぜ言うのか。イスラエルよ、なぜ言い張るのか。『私の道は主に隠れ、私の訴えは私の神に見過ごされている』と」

語り手はイザヤ。

イザヤはBC8世紀の預言者。国は北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂し、北イスラエルは偶像礼拝と不信仰に陥り、内乱と悪王の続出で滅びへの道を突き進み、ついにBC721年、大国アッシリアによって滅ぼされた。ユダ王国も北イスラエルと同様に不信仰と偶像礼拝に陥り、アッシリアの侵略を受け、滅びる寸前であったが、主なる神はイザヤを通してアッシリア軍の敗北を告げられ、事実エルサレムを包囲していたアッシリアの大軍は人手によらず壊滅した。→II列王記19章 しかし、そのようなすばらしい出来事にもかかわらず、ユダ王国も神の前に不信仰を重ね、国は滅びへと向かっていた。そのような時代にイザヤは、国をまことの神へと立ち返らせるために神の預言者として活動したのである。

「ヤコブ」…ヤコブの父はイサク、その父はアブラハムで、彼はイスラエル民族の祖先である。

ヤコブは野心家であり、自分の力や能力で人生を切り開いていこうとする人物であった。この箇所での「ヤコブよ」との呼びかけは彼の神によって変えられる以前の人間性の面に焦点が当てられた表現である。それに対して「イスラエルよ」との呼びかけは、あのヤボクの渡しでの神との格闘の後、神によって命名され、祝福を与えられた時の名前であり、神との契約と選びの面が強調されている。以後、彼は自分をイスラエルと名乗ることとなる。イスラエルとは「神は戦う。神と戦う」の意味。→創世記30:22~30 やがてこのヤコブの子孫はイスラエル民族を形成し、国としてのイスラエルとなる。この節では肉的な面も神との契約の中にある面も両方含めて全人格的に用いられている。そのイスラエルが今、苦難の中で神に向かって「私の道は主に隠れ、私の訴えは私の神に見過ごされている」と不平不満の声をあげている。しかし、実際は神への不信仰、不従順がそのような状態をもたらしているのである。→イザヤ59:1~4

たとえ自分では正しいと思っていても、神の目から見ればそうではないということは大いにありうる。

[28] 「あなたは知らないのか。聞いたことがないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造した方。疲れることなく、弱ることなく、その英知は測り知れない」  
創造者である全知全能の神がここで描写されている。

「主は永遠の神」…時間的な制約のもとにない。昔も今も決して変わることはないお方。

「地の果てまで創造した方」…地の果ても宇宙の果ても、空間的な広がりすべてを創造されたお方。

「疲れることなく、弱ることなく」…主なる神は人間と違って疲れることも弱ることもない。人間は疲れ、弱さ、衰え等のゆえに約束を守れなくなることがあるが、主は決して約束を破られるようなお方ではない。それゆえ聖書に記されている約束は変わることがないのである。

「その英知は測り知れない」…主は全知全能である。

[29] 「疲れた者には力を与え、精力のない者には勢いを与えられる」

28節で描写された全知全能の神は人間世界から遠く離れておられるお方ではなく、人間と親しく交わってくださるお方であり、特に信仰をもってより頼む者には確かに答えてくださる。疲れている者には力を与え、精力のない者には勢いを与えることのできるお方である。

木や石や金属で人間が作り上げた偶像神ではそうはいかない。

[30] 「若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまずき倒れる」

これは人間の世界の現実である。若さや力にあふれる若者も、いつまでもその力を維持していくことはできず、ついには疲れ弱り倒れてしまう。人間の肉の力には限りがあるのである。

[31] 「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができ。走っても力衰えず、歩いても疲れぬ」

「鷲」は人里離れた岩の上などに住み、その強い翼を広げて天に向かって飛ぶことができる。ここではその鷲が、神の力を受けて力強く歩む信仰者の姿を現している。そして、信仰者にとって大切なことは、「主を待ち望む」という姿勢である。現代はスピードの時代、効率性の時代である。求めた物がすぐ手に入る、願った結果がすぐに出る、何でもすぐに与えられることを重要視する。しかし、神の摂理によるスピードは違う。蒔かれた種がすぐに成長して大きな樹木になることはない。生まれたばかりの子がすぐに成長し成人になることはない。そのように私たちも願ったことがすぐに答えられるとは限らない。イスラエルの民は神の選びの民でありながら、現実には非常な困難の中にあり、人々は主なる神の全能性や祝福の約束を疑い、失望と苦しみの中にあつた。まさに、つまずき、倒れた

状態である。イザヤはそのような人々に対して強く「主を待ち望む」ことを教えたのである。

主を待ち望むことの中にはいくつかの要素が含まれている。まず、悔い改めである。果たして自分は神の前に正しい歩みをしてきたのか、自分の心を探って不信仰や反省すべきことがあれば反省し、悔い改めて神に立ち返らなければならない。そのためには時間が必要である。そしてその時間はまた私たちの信仰が練られ、試され、訓練される時間でもある。神からの答えがすぐにはないからといって、あきらめたり、つぶやいたりするのではなく、忍耐をもって待ち望むのである。聖書に記されている信仰者たちは皆そのようなところを通して来た。

もし、何でも私たちが祈ったとおりに、願ったとおりにすぐに物事が成り、実現するようなことがあれば、私たちは忍耐を養われることなく、高慢になり、薄っぺらな人間になってしまうだろう。しかし、私たちは、主を待ち望むことによって訓練され、主のみこころにかなう者とされるのである。アブラハムとその妻サラは高齢となりながらも、子が与えられるとの神の約束を信じて待ち続け、ついにイサクが与えられた。ヤコブも彼自身が神によって取り扱われ、自我が砕かれ、イスラエルとされ、兄エサウとの和解に至るまで何十年もの年月が必要であった。ヤコブの子ヨセフも彼の見た夢が実現する日まで兄たちによって捕らえられ、エジプトで奴隷として売られ、牢獄に入れられ、苦しい年月を過ごさねばならなかった。彼は神のことばが実現するまで待たなければならなかった。しかし、彼はその時間を不信仰に走ったり無為に過ごしたりせず、その時にできることに全力を尽くした。彼はエジプトのことば、文化、ものの考え方、社会の仕組み、習慣、人間関係の持ち方、人に仕えること、謙遜といったことを牢獄の中で学んだ。それが後に彼にとって大きな力となり、やがて彼はエジプトの宰相となり、イスラエル全体を救うこととなるのであった。

イザヤの時代、不信仰と困難と失望と危険の中にあつたイスラエルの民にとって必要なことは信仰をもって主を待ち望むことであつた。主の時が来れば民は新しく力を得て、走っても力衰えず、歩いても疲れない神の民として成長し、神の栄光を表す民、神を心から賛美する民へとすることができるのである。

今この時代を生きる私たちも、それぞれ置かれている環境の中で忍耐と信仰をもって、今、私たちにできることをなしつつ、主の時を待ち望み、新しい力をいただいて驚のようにこの地上の生涯を飛ばたい者になりたい。

ヘブル 11:6「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです」

ヘブル 10 : 36 「あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です」

ヤコブ 1:3~4 「あなたがたが知っているとおりに、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります」